



上:ハンガリーの電気機関車は性能こそ良く判らないものの外観は優美だ。  
下:2等車の車内。

## 5. エステルゴム

### 列車乗り換え

11月7日は高曇りの朝を迎えた。9時をちよつと廻ってチェックアウトする。二泊の料金は16,900Ft(6,207円)でカードで清算した。駅まではキャリーカートを引っ張りながらのんびり歩いて半時間、降っていればタクシーだったろう。

ショプロンからエステルゴムはバスよりも列車の方が便利そうだった。インターネットで調べると、5時間弱で行ける。しかしもう少し詳しく調べると、一旦ブダペストに入り先日利用した東駅から地下鉄(これも一回乗り換え)でアールパード橋駅まで行き、此処から列車でエステルゴムへ向かうことになる。距離は261キロで約5時間の旅だ。このブダペストにおける乗り換えに不安を感じた。

最短距離はジュールとコマーロムで乗り換え、コマーロムから直接エステルゴムへ向かう。これは175キロだけれど、乗り継ぎが悪いので6時間かかる。それでも早く着いて何事かやりたいとい

うわけでもなく、コマーロムからのドナウ河沿い路線(景観)に期待してこれを選んだ。

ショプロン駅で切符を購入。175キロの2等切符が3,360Ft(1,234円)で、これもカードで支払う。20分ほど待つてジュール行きの列車は10時に発進した。ジュール到着が近付き、折良く通りかかった車掌に乗り換え列車を訊くと、降りたホームで待てば良いと云われる。英語でのやりとり不安があり、ホームにいた車掌にもしつこく確認した。先ほど到着した列車は動かず、同じ列車に再乗車したものの、ホームの行き先表示に何も表示されないことが不安要因となる。発車時刻を5分過ぎて、向かいのホームに列車が滑り込み、そちら側の行き先表示にはコマーロムとでたように思う。失敗したかと思ったが、こちらの列車も既に動き出していた。しかしそれからの動きが面妖なもので、1キロほど走ると停車し、ジュール駅へと逆戻りする。

ともかく状況を確認するために、同じ車内にいた人に、コマーロムへ行けるか尋ねるが、回答が得られない。三人目に訊こうかとしていたとき、背後から *Can I help you?* の声がかかった。地獄に仏の思いで振り向くと、若い女性がコマーロムへ行けると答えてくれた。

ようやく正常に発車し、女性車掌が検札に廻ってきたので、コマーロム到着の時刻を、下調べしたメモを見せながら尋ねる。20分は遅れているはずなのに、「これで合っている。」というので、腕時計を指しながら、11時59分かと訊き返すと、ショルダーバッグからスマートフォンを取り出して調べだし、さらに筆算した上でこちらのメモに12.<sup>15</sup> と書いてくれた。さらにスマートフォンの画面を示し

4つ目の駅であることも教えてくれる。

スマートフォンの画面には駅名が表示されていたが、実際に停車したところでは駅名が確認できないまま、数だけ数える。三つ目を過ぎたところで下車の支度をしてデッキ方へ移動すると、途中でオバサンに呼び止められた。コマーロムで降りようとしていることを確認した上で、「あの人もコマーロムで降りるはずよ。」と先ほどの若い女性を指した上で、わざわざ席を立てて彼女に確認してくれた。よっぽど危なっかしい旅人に見えたのだろう。情けないことだが事実だから仕方がないので、ともかく若い女性と共に下車する。

下車後に改めて礼を述べ、一旦は距離が離れたが、駅舎へ向かう途中でもう一度彼女が踵を返し近付いてくると、コマーロムでどこへ行くか訊く。行く先に困るようであれば助けてくれるつもりだったのだろうか。この駅は乗り継ぎで、待ち時間を利用して昼飯を摂るつもりと説明したところ、安心したようでもあり、若干拍子抜けしたようでもあった。ともかく皆、すこぶる親切だ。

コマーロムに関する情報は日英ガイドのどちらにもなく、以前ならば目視できる範囲に食堂がなければ食事は諦めるしかなかった。しかし今回は予めインターネットでグーグルの地図を利用して検索した。その結果、駅から徒歩5分の所にヴォシュモチカ食堂兼ペンションが見つかった。半信半疑ではあったがそこを目指す。

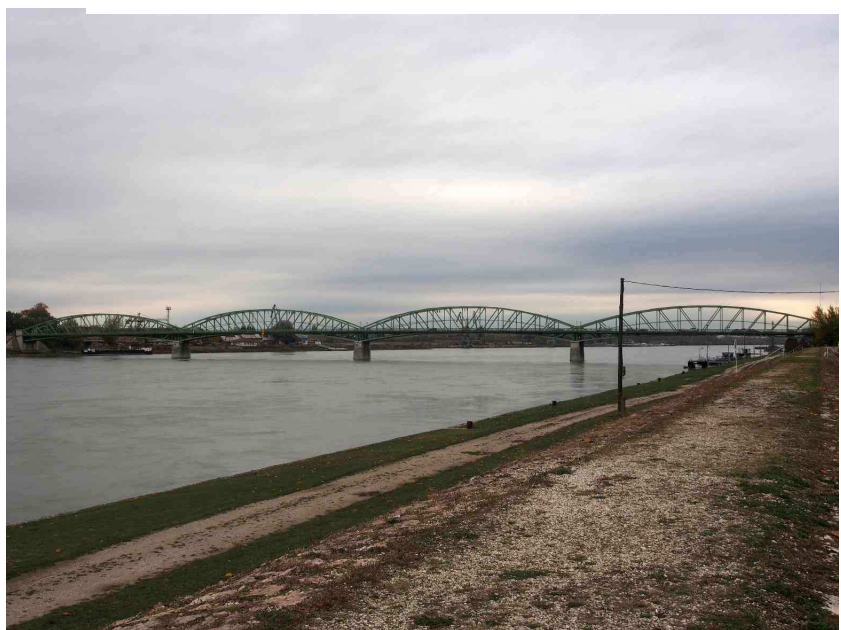
ドナウ河に沿って下流方向へ500メートル行き右折する。すぐに陸橋で鉄道を跨ぎ、100メートルほどで地図に示された通り道路の右側にドライブイン風の食堂があった。

12時半だったが80席以上ありそうな店内に先客は一組だけだ。もたらされたお品書きは4カ国語表記で、マジャール語、ドイツ語、英語ともう一つはスロバキア語らしい。国境の街だと再認識する。

比較的軽そうな、鶏の胸肉細切りフレッシュサラダ添えを選んだ。酒はハウスワインと思ったが、特にそんなものはないとのことでお品書きからエグリ・ビカヴェール（エゲルの雄牛の血。ブダペストの初日に飲んだもの。）をグラスで貰う。



コマーロム駅。



駅前で街道を渡り堤防に登ると目の前はドナウ河。橋を渡るとスロバキアの街コマーノだ。



ヴォシュモチカ食堂。



簡単な料理だと思ったのに中々出てこない。仕方なくパンをつまみにワインを飲み、二杯目になってしまった。20分たってようやく鶏肉サラダが登場。味に関しては特筆することもなく、量的にはほぼ予想通り。



半時間かけて完食し、ワインも合計で8杯分(800cc。100ccが1グラスだが面倒なので3杯目からダブルで注文した)を干す。胃袋には多少余裕があったし、発車時刻までは50分ほどあったのでカプチーノを注文する。勘定は鶏肉1,700Ft(624円)、ワイン1,520Ft(558円)、カプチーノ260Ft(95円)。カードで支払いチップの小銭を置く。

上: 鶏の胸肉細切りフレッシュサラダ添えと部分拡大。  
下左: カプチーノ。下右: ヴォシュモチカ食堂兼ペンション外観。2階が宿泊施設らしい。

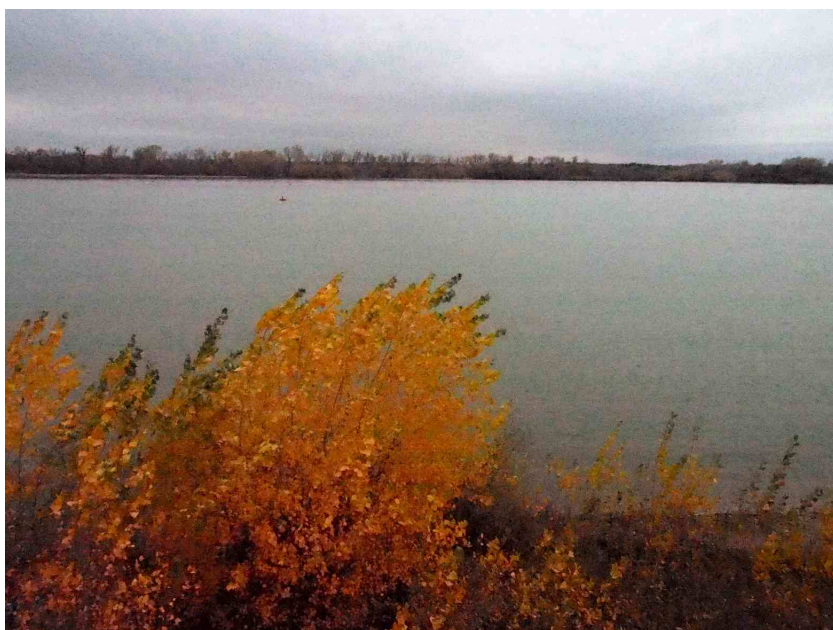


駅へ戻って待つことしばし、2時20分に一両のディーゼルカーが到着した。数人の乗客が下車し、入れ替わりに乗ったのは私を含め二人だけだった。記憶が曖昧だが、この便はいわゆるワンマンカーだったような気がする。



上左: エステルゴムとを連絡する車輛。上右: 車内。下: 駅の案内表示

コマーロム、エステルゴム間はドナウ河に沿って行く部分が多いので、車窓からの景観に期待していたがさっぱりだった。考えてみればこの辺りのように平坦な土地を流れる河川は変化に乏しく、それを走行中の車窓から垣間見るのでは、いよいよシャッターチャンスが限られてしまう。曇り空も悪条件の一つだったし、かててくわえてなぜか感度設定がISO2560になっていたため、撮影された画像はノイズの多いザラザラ画面になってしまった。



車窓から見るドナウ河と河畔の紅葉。3時半。エステルゴムへ17キロほどだ。

定刻の3時58分にエステルゴム駅へ到着した。英ガイドの地図を見ても駅は範囲外だし、街の中心部まではかなりの距離がありそうなのでタクシーを利用したかった。しかし一台もない。降りたの客が私を含め2名だから客待ちしても仕方がないのだろう。駅前広場を横切っていると、「ブダペスト？」と訊かれた。ブダペスト行き長距離バスの運転手らしく、間もなく発車らしい。

迫り来る夕闇は気分を不安にするが、先ほど車窓から見えた大規模寺院が、ハンガリー最大規模と云われるエステルゴム大聖堂とみなし、そちらへ向かって歩き始めた。

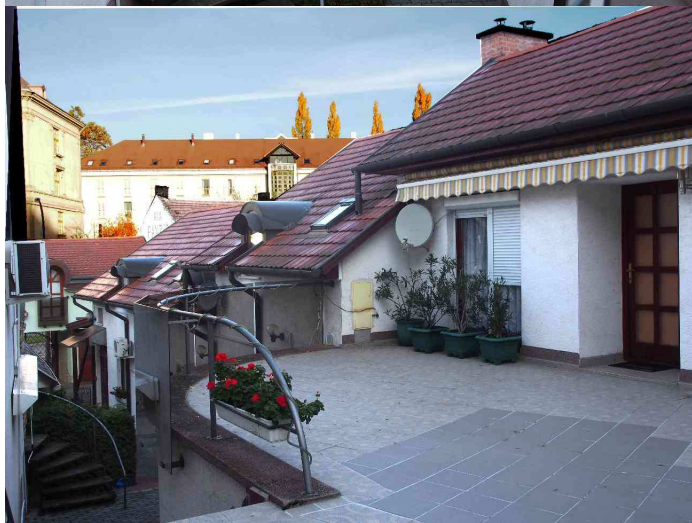
10分ほど歩いて雑貨屋があったので道を訊く。気の良さそうなオバサンが一人で店番をしていたが、英語は通じない。しかし英ガイドで目指すリオ・ポンズューの番地を見せると、進行方向は間違っていないらしい。しばらく歩き、二軒目は少し考えて本屋にした。此処は店主らしいオバサンと客のオヤジの双方に英語が通じる。アドレスですぐには判らなかったが、商売ものの地図をわざわざ出してくれて確認する。方向は間違いなく、10分ぐらい歩けば良いらしい。

そのくらい歩いたところで、今度は衣料品店で尋ねる。客のオバサンが親切で、店から出て付近のバス停にいた数人に訊いてくれた。傍らのベンチにたむろしていたオジサン、オバサンが加わり、皆であれこれ思い当たる場所を侃々諤々始めた。すると折良く通りがかった女子学生風が英語で、「知っている。そちらの方へ行くから案内してあげる。」とのことでわざわざ寄り道して、ほぼ宿の前まで行ってくれた。とにかく皆親切だと再び感謝・感心する。

リオ・ポンズューはオーナーらしいオヤジが一人いるだけで、同宿者やスタッフはいなかった。フロントといったものはなく、朝食を摂る食堂にバーカウンターがありその脇に置かれた小テーブルでチェックイン手続きを済ませる。

此処の客室は基本的に内廊下ではなく屋外から各部屋へ直接入るようになっていた。案内されて部屋に荷物を収めると、スーパーマーケットの所在を訊く。とにかく酒を買い求めたいし、フロントがないから今のうちに情報収集しておかないと後ではオヤジをつかまえ損なうかもしれない。

市内平面図の類が欲しかったがない。しかしスーパーマーケットは判りやすい場所にあり、先ほど道を尋ねたバス停付近らしいと判明した。緩い坂道を半ば小走りで下り、無事にスーパーマーケットを発見。



翌朝撮影したリオ・ポンズューの概観。上：奥に道路とを仕切る鉄格子ゲートが小さく見える。通路右側に沿って各部屋への入口。  
上：外から見る泊まった部屋。どことなくコテージ風を感じる。

ウォッカがないので訊いたら、レジのところを買うとのこと。してみるとショップロンの食品店で店員がまくし立てたのは、レジ横の棚からウォッカを勝手に取り出したことが原因か？今となっては良く判らない。ともかくミネラルウォーター(炭酸)500cc79Ft(29円)、ソーセージ64g79Ft(51円)、ヨーグルト125g4筒279Ft(102円)、ウォッカ700cc3,199Ft(1,175円)、レジ袋25Ft(9円)など。

宿へ戻ると通路以外の照明は消され、全体が静まりかえっていた。部屋に戻って晩酌の支度をしながら設備その他もチェックする。暖房設備はスチーム暖房以外にエアコンがあり、浴室には小型温風暖房機もあった。ヘアードライヤーが置かれた宿は今回の旅で初めてで、小型冷蔵庫も有る。道路からの騒音は一切ないばかりか、同宿者もなく近隣からの物音もせずで、ショップロンのヴィエデン・ペンションと対称的だった分、静寂さが際だった。

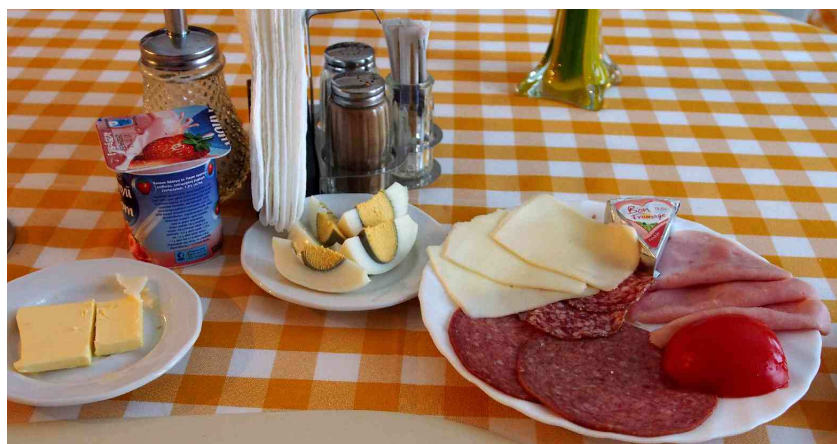
### エステルゴム大聖堂

11月8日は好天気が回復した。朝7時の室温は20℃と快適で、朝食後にはシャワーを浴びる。話が前後するが昨夜、彼から朝食を何時にするか訊かれ、逆に何時が普通なのか訊き返すと8時との回答で、その時刻にした。

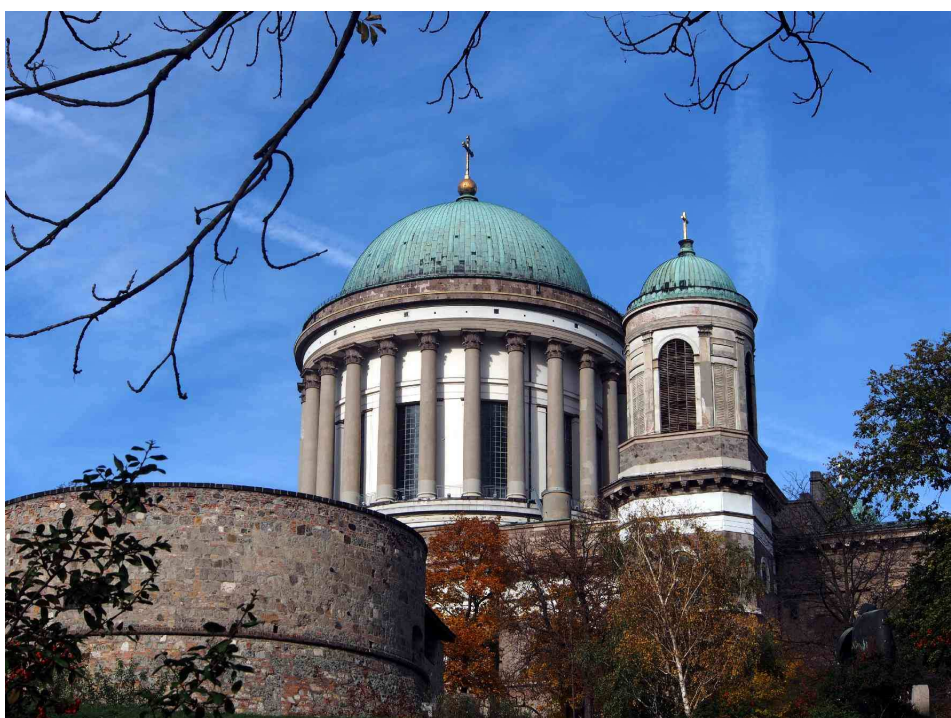
8時丁度に朝食堂へ降りて行くと、ドアが開け放たれ、オヤジがテーブルセッティングをしていた。挨拶を交わした後、オプションを訊かれて茹で卵などが追加される。

朝食は早々済ませ、部屋へ戻ってメールをチェックした。数通あったものの重要なものはない。返信など幾つか作製したけれど大して時間も要さなかった。しかし街歩きに出発したのは10時を廻ってからだった。この街に大聖堂以外これと云って見所はなく、出先からそのまま昼食に繋がるにはこのくらいの時刻が適当と思われたためだ。

宿からエステルゴム大聖堂までは直線距離ならば300メートル以下で、正に指呼の間だ。地図で順路を確認すると、宿の前から坂道を一旦下って交差点まで行き、そこから大聖堂が頂上にある丘を登る。丘全体が公園のようになっていて、適当に遊歩道を選びながら高い方へ行けば自然に大聖堂の正門に出た。



朝食はオヤジが必要を訊きながらアレンジしてくれた。簡素だが充分だ。



エステルゴム大聖堂。

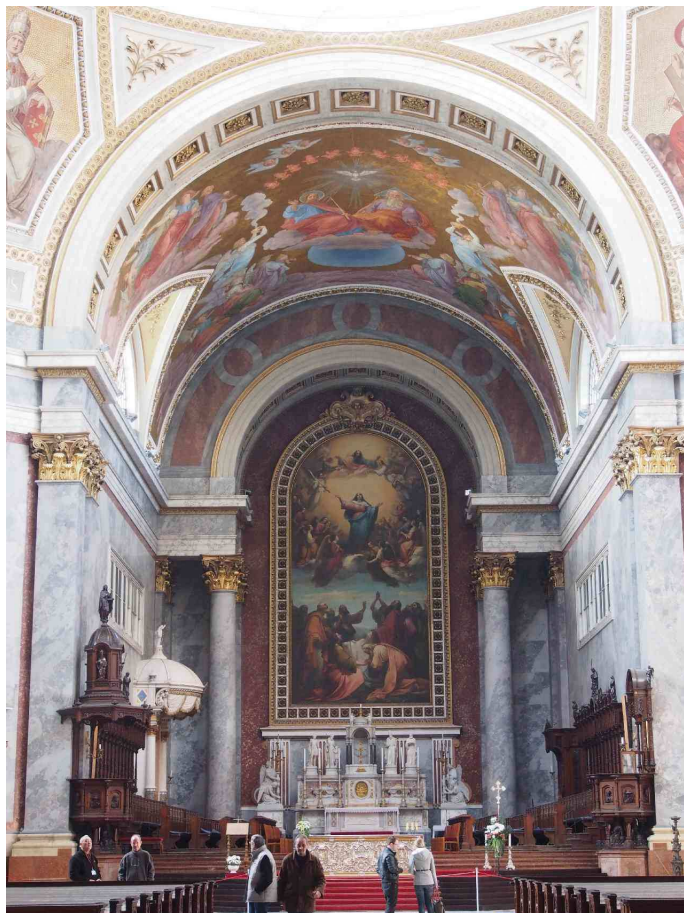
「大聖堂」と呼ばれても、ジュールのそれなどはカテドラルの和訳でそれほど大きくない。しかしエステルゴムではハンガリー・カトリック教会総本山であり、文字通り巨大だった。ブダペストの聖イシュトバーン大聖堂やペーチの大聖堂を上回り、ハンガリー随一の規模だ。そのサイズは奥行きが118メートル、幅が40メートルで、中央部に設けられたドームは直径53.5メートル、高さ100メートルもある(日ガイド)。

初代国王のイシュトバーンは彼の父ゲーザ公がこの丘に築いた城で969年(975年説もあり)に生まれ、1000年12月25日にローマ教皇のシルヴェステル2世から授かった冠を用いて、エステルゴムで戴冠式を行った。すなわちキリスト教国ハンガリー生誕の地が此処といえる。そんな由緒を考えるとそれなりの期待があった。

しかしいざ内部に踏み込んでみてガッカリした。確かに巨大ではあるが、受ける印象が全体的に希薄なせいだろう。一枚のキャンバス地に描かれたものとしては世界最大といわれる祭壇画も記憶にはほとんど残っていないし、天井のフレスコ画も感銘を受けることがなかった。

これは建設開始が1822年だったものの、1848年のハプスブルクからの独立などで中断され、結局は1869年によく完成したことと無縁ではあるまい。要するに資金的にも人心的にも、「より良きものを作り上げる。」ことに集中できなかったものと思われる。かててくわえて、ハンガリーは大国でもなかったし、新大陸から巨大な富が流入するとか、商業的に大成功した時期もなく、どちらかと云えば継続的に貧しい国であり、資金的にかなり低く限られたことがだめ押しだろう。

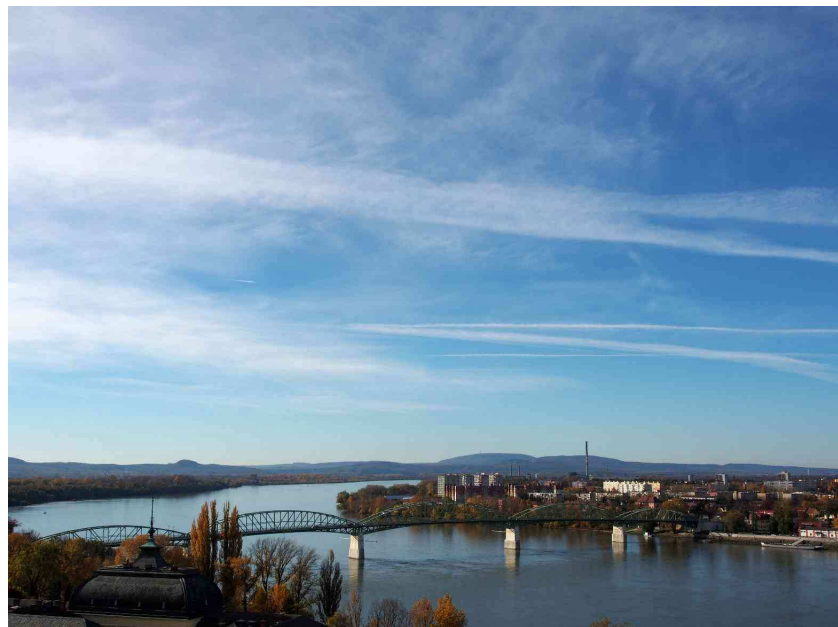
しかしそのような制約があったならば、もう少し小振りでも心を込めて珠玉の教会を作れば良さそうに思う。ところが同じような時期に作られたブダペストの聖イシュトバーン大聖堂(1851~1905)や国会議事堂(1885~1896)、ペーチの大聖堂(19世紀末)など、どれも同じようなこけおどしの印



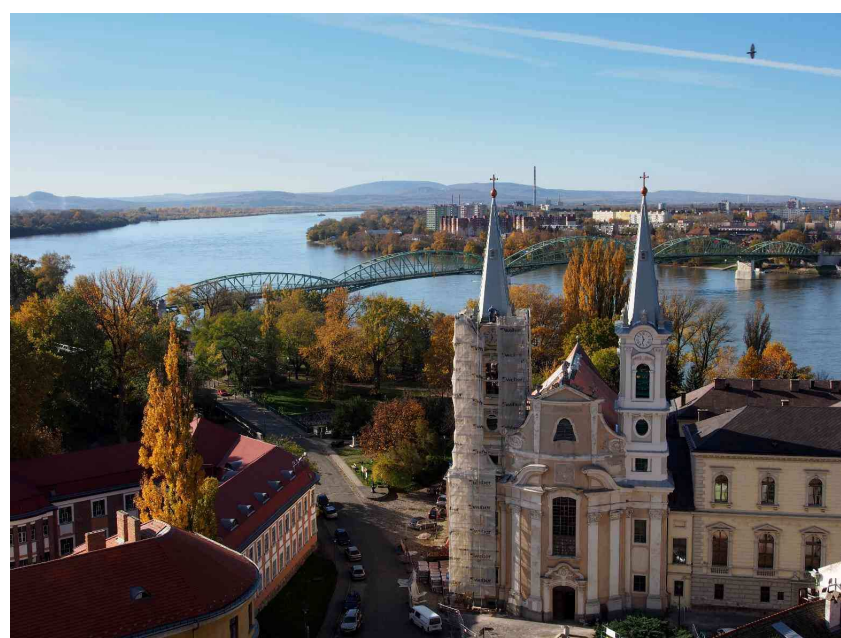
大聖堂の内陣。

象を受ける。結局この時代の気分は二重帝国においてオーストリアを何とか見返したい一心だったのだろうか。

大聖堂を出て東へ向かうとすぐに平坦地は終わり、ドナウ河によって作られた河岸段丘の上にて。陽光と青空に恵まれた景観は適度な白雲がコントラストを作り、眺めるのにも撮影対象として申し分ない。この辺りの河幅400メートル強でそれを渡れば対岸はスロバキアだ。



大聖堂のある丘から見下ろすドナウ河。対岸はスロバキアだ。鉄橋は MARIA・ヴァレーリア橋。



キリスト教美術館。



ドナウ河が左側の小島により枝分かれした部分。

崖の麓から川岸までの平坦地にも由緒のありそうな教会が見えた。ファサードに双頭の鐘楼が設けられている。しかし撮影対象としては、残念なことに左側の塔が修復工事のため足場と防護ネットで覆われている。後ほど建物の前まで行ったものの、工事中のためか前の広場からフェンスで囲われ中に入ることは出来なかった。

ちなみに教会と思ったのは誤りで、もとは大司教館だった建物を現在はキリスト教美術館に転用されていた。この思い違いが災いし、工事中の仮設出入口を見つけたものの、そこにいた係員に、「此处は美術館への入口です。」と云われ、違うものだと通り過ぎてしまったのだ。それでもキリスト教美術にあまり興味はないから、その意味では無念さもない。

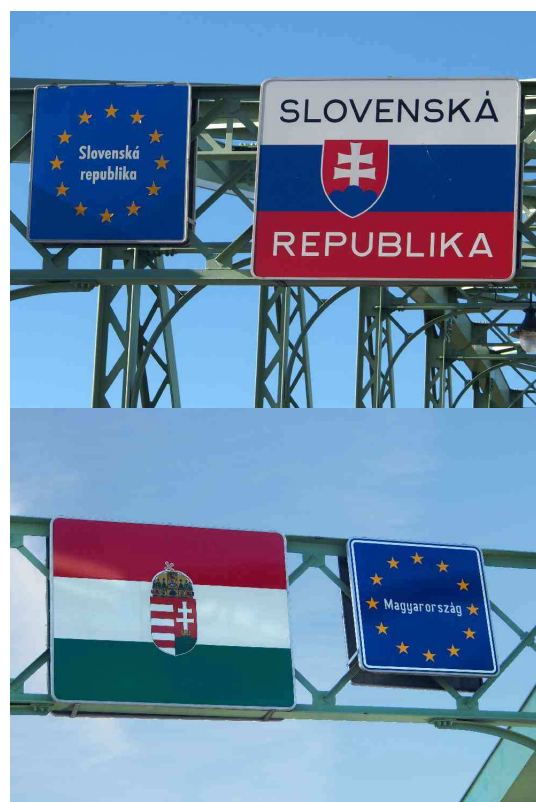
話が先走ってしまったが、入口を求めて教会(実は大司教館)を一周する。裏側に近道は見付からず、結局1キロほど迂回してドナウ河沿いの道に出た。(正しい入口は通り過ぎていたから当然のこととして)入口の見付からないまま、虚しく降り出し点近くまで来てしまい、教会

に関してはきっぱり諦めることにした。

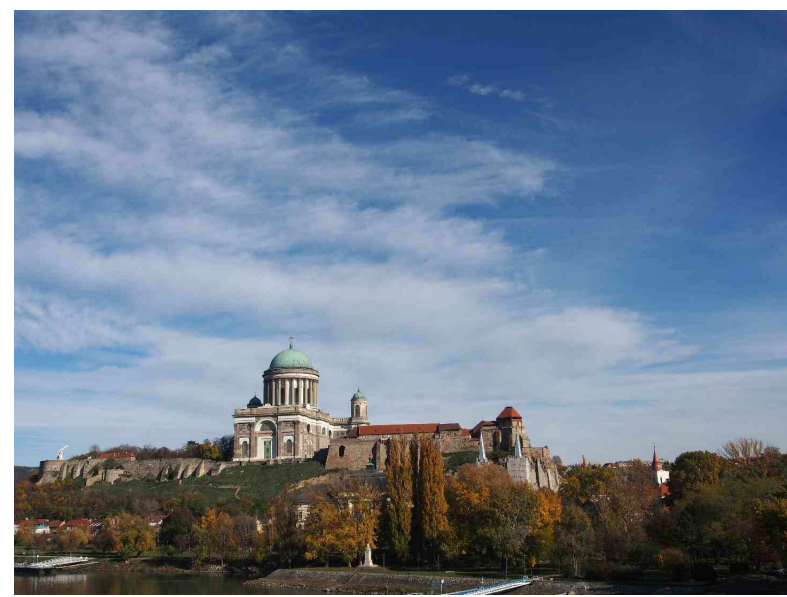
ドナウ河はこの地に達するまで既に1,000キロくらい流れているので、河の水は清流とは云いがたい。しかしこの日は良く晴れて青空を川面に映し、実際より余程綺麗に見えた。

対岸のスロバキアとを結ぶマリア・ヴァレーリア橋は1895年に架設された鉄橋だった。第二次大戦末期、ナチがハンガリーから撤退する際にブダペストの橋などと共に爆破された。そのために戦後はコマロムからブダペストまでの約120キロに橋がない状態が長く続いたが、冷戦終結後再建話が始まり、EUから50%の資金援助を受けて工事が開始された。竣工したのは2001年10月11日。

そんな歴史に思いを馳せれば、大動脈として蘇った橋をイメージしてしまおうが、実際に橋を渡ってみると往復に要した20分間に通過したのは数台の車と二、三人の通行人だけだった。50年近く途絶えていたため人や物の流れが激変してしまったのだろうか。



橋のほぼ中間点にある国境標識の裏表。



左:橋の中間点から見る大聖堂。



右:マリア・ヴァレーリア橋全景。

話が前後するけれど、橋を渡ってスロバキアの地を数十メートル歩いた。しかし国境を渡った実感は全くない。ちなみに2002年3月22日までは日本人がスロバキア入国するためのビザが必要で、この日を過ぎても出入国管理のブースがあったらしい(いつなくなったかは不明)。

マリア・ヴァレーリア橋をハンガリー側に戻ってからは、街並みを見物しつつも昼食を摂るのに適当な場所がないかに専ら神経を配って歩く。しかし思いの外に見かける飲食店は少なく、意に染む店は全くないまま宿へ戻ってしまった。

一休みしながら英ガイドを読み直したりしたもの、これはと思う食堂も見付からない。食欲がそれほどなかったこともあり、宿の並びで60メートル



河畔でトートバッグを持つ老婆を見かけた。最初は買い物帰りかと思ったが、時々立ち止まっては何かを拾いバッグに入れている。近付いて良く見ると、拾った枯れ枝でバッグがほぼ満杯になっている。燃料にするのだろうか。これは生活の厳しさを表すのか、金をかけなくても燃料が手に入る長閑さを意味するのか？

ほどの所にある食堂にした。前を通った時に pizzéria の文字を目にしていたが、ハンガリー料理から久しぶりに変えてみたくなったためだ。ちなみに店の名前はミュージアムガーデンレストラン兼カクテルバー (Múzeumkert Étterem és Kocktélbár) だった。

店に入ったのは1時ちょっと過ぎだから時分どきと思うが、先客はおらず若いボーイが二人退屈そうに雑談していた。もたらされたお品書きはマジャール語だけだ。しかしピザの所には15種類もあって、Son-Go-Ku など正体不明のものもあったがおおむね推測が出来る。カプリチオーザにしてハウスワインの赤をグラスでダブルにして貰った。

まともなピザであれば10分程度待たされるのは仕方ない。ともかくワインを飲みながらのんびり待った。サラダなど頼んで



上:中庭席。下:お通しサラダ？





ピザ・カプリチオーザ。

あればそれをツマミにするが、この店で有り難かったのは特に何かを注文したわけではないのに、ちょっとしたサラダがお通しのように出されたことだ。ブダペストのクラッススでオリーブの実とパンが出たことを考えると、「お通し」はこの国でお決まりとは云えなくても珍しくないのかもしれない。

10分ほどでピザ・カプリチオーザも登場。まずまずの味わいだったけれど特筆する

ほどのことはない。客は女の子が一人来て昼飯を食べていた。そのうち若いカップルが入店。ボーイ達とは友達関係らしく、奥の方で一つのテーブルを囲みソフトドリンクを飲みながら話をしている。そのうち奥からカードを持ってきてゲームを始めた。ボーイ達も一緒だ。

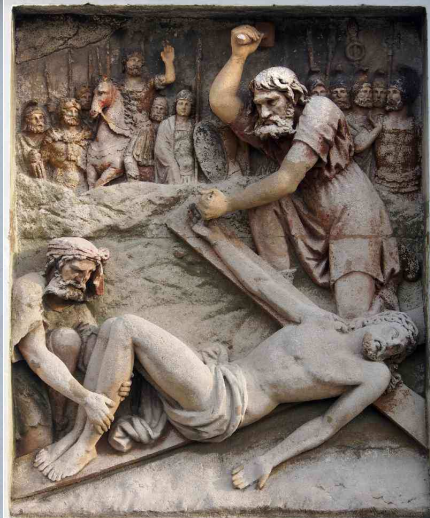
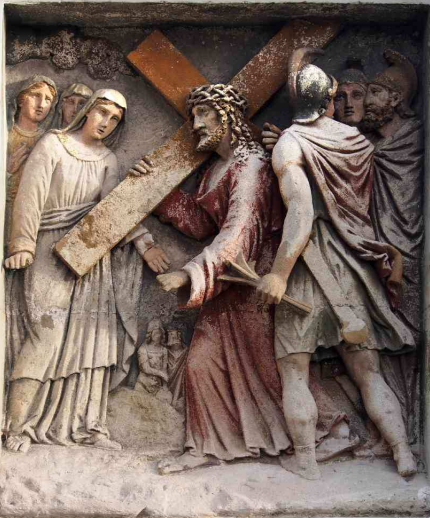
国により常識や習慣も異なるので一概に判断できないものの、やはり程度の低い店だと思う。それでもこちらの席からは距離があったので、さほど不愉快さを感じなくて済んだ。半時間ほどでピザを食べ終えカプチーノを締めとする。勘定は、ワイン3杯(600cc) 2,940Ft(1,080円)、ピザ 1,290Ft(474円)、カプチーノ490Ft(180円)。

食堂を出て宿の前を素通りし、宿の裏山に登る。午前中に大聖堂の丘から遠望し、瀟洒な佇まいが好ましく感じられた教会を見物するためだ。一旦宿へ戻って昼寝などすると、再び出かける気力が萎えそうな気もしていた。

沿道には庭付き一戸建てやテラスハウスなどが連なり、庭やベランダ手摺りの植木鉢には草花が咲き誇っていた。坂道を登って行くと祠があり、聖書をテーマにしたハイレリーフが飾られている。50メートルほどの間隔で二つ目、三つ目もあった。これまで目にしたことのないものだが、此処が特別なのか、ハンガリーでは一般的なのか通りすがりの旅人には判定不能だ。



大聖堂の丘から瀟洒な教会が遠望された。



祠とそこに飾られているハイレリーフ。

登るに従い視界が広がる。坂道が一段落し頂のような所に教会はあった。遠望したときに受けた印象は裏切られず、豪華さはないけれど近隣の住民が心を込めて建設し、日々祈りを捧げる場所として大切に使われているように感じられる。そうになると内部も確かめたくなるのが人情だが、生憎扉は閉ざされていた。

宿に戻って一眠りした後、オーナーのオヤジを捜す。食堂などは明かりが消えていたので、同じ敷地内にある一戸建ての呼び鈴を押してみた。思惑通りオヤジが顔を出した。「明日の朝9時9分の列車に間に合うようタクシーを呼んで欲しい。」の頼みは問題なく承知して貰えた。この時間に合わせて朝食も頼み、7時半からになった。ついでのので宿の支払いも済ませてしまう。二泊の料金は20,840Ft(7,654円)で、カードで清算した。



裏山の瀟洒な教会。

翌朝7時半に食堂へ降りると、オヤジはテーブルをセットしながら、「タクシーの代わりに俺が駅まで送るよ。」とのことだ。そもそもタクシーを呼んで貰う理由は、雲助運転手を避けたいからで、その意味からするとオヤジに送って貰った方がより安全性は高い。即座に同意した。

毎度のことだがせっかちな私は8時10分に宿を出る。駅までの距離は3キロで、いくら払ったか記録し忘れたので不明だ。請求は多分1,000Ft(367円)だったと思うが、ぴったりの持ち合わせがなく、オヤジも釣銭がなかったので、小銭までかき集めて不足分は若干おまけして貰ったのは覚えている。900Ft(331円)くらいだったのだろうか。

出札窓口でブダペストまで53キロの切符を1,120Ft(411円)で購入。外の気温は8℃だったので待合室で待つ。出入り口には禁煙マークが貼ってあり、昨年旅したブルガリアなどに比べ、禁煙に対する意識が進んでいることに感謝。

発車時刻の20分ぐらい前にホームに移動した。そろそろ入線してくるかと思っただけで、一向に列車は姿を現さない。しばらくして50メートルくらい離れたところで待っていた老婦人が、駅員と言葉を交わした後スタスタ歩いて前を横切り駅前広場の方へ姿を消した。その時は、「トイレでも行ったのか...」と思ったが、随分時間が経っても戻ってこない。そのうち発車時刻になってしまっ

た。おかしいと思って駅員の方へ数歩あるくと、向こうもこちらの存在に気付き、ちょっと慌てたように広場の方を指して、「急げ。」みたいな身振りをする。何らかの理由でブダペスト行きはバスが代行しているのだ。一昨日の夕刻にいたバスも代行だったと判る。ともかく小走りで間に合った。「出札窓口で切符を買うとき一言云ってくれば良かったのに。」と思う。



宿のオーナーと駅まで載せて貰った車。駅前広場にて。